

# 1920年代における日本の図案家に影響を与えたフランスのファッションプレート

徳山 孝子

神戸松蔭女子学院大学人間科学部

Author's E-mail Address: tokuyama@shoin.ac.jp

---

## The French Fashion Plates that Influenced Japanese Graphic Designers in the 1920s

TOKUYAMA Takako

Faculty of Human Sciences, Kobe Shoin Women's University

### Abstract

プラトン社発行の雑誌「女性」は、1922年5月号～1928年5月号までの通巻72冊、出版された。その表紙を図案家の山六郎と山名文夫が担当した。1924年～1927年にかけてモダン・ガールという言葉が流行し、図案家たちは、新しい女性像をフランスのファッションプレートに重ね合わせた。本研究では、図案家に影響を与えたファッションプレートと雑誌「女性」の表紙を比較するとともに、女性の身体とファッションの関係性について明らかにした。

72枚の表紙は、「ガゼット・デュ・ボン・トン」誌の流用があった。ファッションプレートのデザイン構図は、中央にポーズしたエレガントな女性像、背景には物語性があった。衣装のデザインには、ジャポニスムの影響を受けた直線のキモノスタイルが多く採用された。山や山名は、エレガントな直線的なドレスの中に隠された曲線の身体を可視化した。新しい女性像はしぐさ、動作、姿勢で顕在化したのである。「ガゼット・デュ・ボン・トン」誌から流用した女性像は、昭和初期には日本の断髪姿になり、廃刊に近づく時にはモダンな日本女性が表紙を飾った。

From May 1922 to May 1928, the magazine “*Woman*” was published by PLTN Inc., in 72 volumes. Its cover was designed by the designers Rokuro Yama and Fumio Yamana. Between 1924 and 1927, the term “modern girl” gained popularity, and designers began to superimpose new images of women on French fashion plates. In this study, we compared the fashion plates that influenced the

designers to the cover of the “Woman” magazine and clarified the relationship between the female body and fashion.

The covers of all 72 volumes were appropriated from the “*La Gazette du Bon Ton*” magazine. The design composition of the fashion plate featured an elegant female figure posed in the center, with a narrative in the background. The design of the costumes often followed a straight-line kimono style, which was influenced by Japonism. The terms Yama and Yamana visualized a curvaceous body hidden within an elegant linear dress. The new images of women were manifested in gesture, movement, and posture. The image of women appropriated from the “*La Gazette du bon ton*” magazine became the popular Japanese hairstyle in the early Showa period, and when publication of the magazine was about to cease, a modern Japanese woman graced the cover.

キーワード：アール・デコ、モダン・ガール、雑誌「女性」、ジャポニスム、「ガゼット・デュ・ボン・トン」誌

Key Words: art deco, modern girl, magazine “Woman”, Japonism, “La Gazette du Bon Ton” magazine

## 1. はじめに

日本では、いつ頃からファッションプレートが見かけられるようになったのであろうか。明治時代は、「女学雑誌」、「風俗画報」、「家庭雑誌」などが発表された。大正時代には「文芸雑誌」、「大衆雑誌」などが女学生、職業婦人、専業主婦などを対象に新しい女性像を提示し、女性を取り巻く社会を紹介した。出版社は東京中心であったが、関西からも出版された雑誌「女学生画報」があった。のちに中山太陽堂（化粧品会社）が買収して、雑誌「女性」として改題し、クラブ化粧品の宣伝に利用した<sup>1)</sup>。復刻版、雑誌「女性」の監修者 鶴見俊輔は、「大正時代は、これもひとつの女性の時代だった。それは、その前の明治時代と幕末とくらべ、そのすぐあとの昭和軍国主義時代にくらべて、言える。自分のたのしみをさがしあて、そのたのしみを生涯にわたって保とうとする、そういう女の人がふえてきて、めずらしくなくなってきた。」と説明している<sup>2)</sup>。当時は、モダン・ガール、モガ・モボと言われた時代でもあった。

雑誌「女性」は、1922（大正 11）年 5 月号～1928（昭和 3）年 5 月号までの通巻 72 冊、出版された。図案家・挿絵画家は、山六郎（明治 30 年～昭和 49 年）や山名文夫（明治 30 年～昭和 55 年）を筆頭に、岩田専太郎（明治 34 年～昭和 49 年）や竹中英太郎（明治 39 年～昭和 63 年）などである。その活動については、多くの書誌が「日本のアール・デコ様式」もしくは「一九二〇年代を代表する小説挿絵」との評価をもって紹介している。山や山名は、19 世紀末の英国で活躍したアール・ヌーボーを代表するイラストレーターであるオーブリー・ビアズリー（Aubrey Beardsley）の影響を受けていると評価されるが、総体としては「日本のアール・デコ様式」として位置づけられた<sup>3)</sup>。西村美香は「第 2 部 プラトン社の雑誌デザイン」で、雑誌「女性」の表紙では全 72 点のうち約半数がフランスンのファッションプレート、主に雑誌「ガゼット・デュ・ボン・トン」からの流用を指摘している<sup>4)</sup>。西村氏は、流用されたファッションプレートを次の 4 つに分析した。＜分類 1＞は、原画をそのままに用いているもの、＜

分類2>は、原画のサインだけを削除して用いたもの、<分類3>は、サインを含め、色彩や背景、人物の細部を若干変えて用いているもの、<分類4>は、原画の一部を用いて再構成したもの、である<sup>5)</sup>。その他、西村氏によって詳細な研究がなされ、日本の1920年代のグラフィックデザインの貴重な資料となった<sup>6)</sup>。

本研究は、日本の図案家に影響を与えたフランスのファッションプレートと雑誌「女性」の表紙を比較するとともに、女性の身体とファッションの関係性について明らかにすることを目的とした。

## 2. 雑誌「女性」から読み取るモダン・ガール

「モダン・ガール」という言葉は、大正13年8月号に登場した<sup>7)</sup>。北澤秀一は、「モダン・ガールの新しい傾向は近代の時代精神が生んだもの」と説明している<sup>8)</sup>。モダン・ガールは、自立した女性であり、男性と同じように振る舞い、伝統的思想を持たない、自己を尊重する女性像であった。北澤は、世界的な傾向であると予測しながら新しい時代の現象を読み解いた。

大正13年8月号から1年以上の経過した大正14年12月号のモダン・ガールは、洋服を着こなす女性として現れるようになった。銀座を歩いている人の中には、申し分のない着こなしの人がだいぶ見えて来た<sup>9)</sup>。大正末期から昭和初期にかけて、婦人の断髪が現れるようになった。島田青峰は、「衣食住の便利主義を忘れて、一つの奢侈贅沢の域にまで進んで来たのである。即ち内容を離れて、唯只単に形式的に発達を遂げつつあるというのが今日の状態である」と説明している<sup>10)</sup>。北村豊太郎は、「断髪の後ろ首の、その青々と剃り上げた美しさは、妙にチャーミングなものだ」と小説の中で記している<sup>11)</sup>。高田義一郎は、「外観ばかりの事で、内容入れかえる必要は無いのだから、要するに古道具をペンキで塗って新しい様に見せかけただけのことだ。モダン・ガールというのは、断髪して後頭部を青く剃り上げたり、洋装と称する不規則な布片をぶらさげて、練馬大根そのけの肉體美を見せたりしただけの代物らしい」と述べている<sup>12)</sup>。時間の経過とともに身体の外観と容貌が圧倒的に大きな役割をもつことがわかる。

雑誌「女性」は、初めて洋服の指南役としてマダム・アニー・ゴリスを迎え、巴里婦人の心に移そうとした<sup>13)</sup>。巴里で流行している直線的な、無駄な飾りのない、品のいい服として、ボレロのついた2種類の洋服を紹介した。型紙を掲載し、作り方、素材、色の組み合わせ、コーディネートに至るまで説明した。編集後記には、本号からアニー・ゴリス夫人が婦人の洋服、子供服、装身具、室内装飾に至るまで毎号執筆することになった<sup>14)</sup>と記載されていたが、残念ながらこの号以降の掲載はない。次号からは、容姿を中心とした記事が中心となり、顔型は平たい顔と丸顔しかない指摘した「簡単な美容法」<sup>15)</sup>、「美顔手術による若返り法」<sup>16)</sup>、「欠点を隠す髪のかき方」<sup>17)</sup>となった。さらに次号には「モダン・ガールの解剖」<sup>18)</sup>という記事が掲載され、モダン・ガールは不良少女の別名となり、心身の不均一さを感じさせた。

### 3. 雑誌「女性」の表紙を飾ったフランスのファッションプレート —新しい女性像の構築—

1920年初頭、女性の自立が世界的に認められつつあった<sup>19)</sup>。フランス・パリでは、クチュリエ、ポール・ボワレ(1879-1944)を中心に西洋のスタイルとファッションが劇的に変化した時期と重なる。ベル・エポック時代のファッションは、鯨骨のコルセットできつく締め上げS字型を作る美しさを身体に求め、リボンやレースで装飾したイブニングドレスが好まれた。ボワレは、胸元からドレープを描き、身体に自然な形に沿った、流れるようなロングドレスで、コルセットやベチコートが必要としないドレスをデザインした。その新しいスタイルをポール・イリーブ(1883-1935)に手彩色でポショワールと呼ばれるステンシル技法を用いた図版を依頼した。ボワレは、ファッション・デザインに新たな旋風を巻き起こした。1910年ごろからコルセットの広告の頻度は減少していった。1911年、ボワレは第2弾として、ジョルジュ・ルパブ(1887-1971)にイラストを依頼した。ルパブのファッション・イラストレーションは、後のアール・デコのイラストレーターや写真家が模倣することになった。

「ガゼット・デュ・ボン・トン」誌は、シャルル・マルタン、ジョルジュ・ルパブ、ウンベルト・ブルネレスキ、ジョージ・アラン、ジョルジュ・バルビエを起用した。雑誌「女性」の表紙を飾ったファッションプレートは、ジョルジュ・バルビエの作品が数多く選ばれた。バルビエは、120枚以上のポショワール・ファッションプレートを「ガゼット・デュ・ボン・トン」誌に寄稿している<sup>20)</sup>。バルビエのファッションプレートには、ロココ趣味、モダニズム、オリエンタリズム、ジャポニスム、シノワズリが見事に融合していた。ファッション雑誌は、当時のエレガントなライフスタイルを紹介するとともに読者を楽しませることを意図していた<sup>21)</sup>。ファッションプレートのデザイン構図は、中央にポーズをした女性像、背景には物語性があった。エレガントな衣装、楽しい時間、美しい人々、エキゾチックなライフスタイルが描かれた。

アール・デコモデルは、ファッションプレートから新しく開発された女性らしさを高めるためのあらゆるものに、いとも簡単に移行した。化粧品、香水などは大きなビジネスとなり、アール・デコ様式の魅力的なパッケージや広告の恩恵を真っ先に受けたのである。帽子、扇子、リボン、日傘、手袋、宝石類など、女性のエレガントな装身具も同様であった<sup>22)</sup>。

### 4. フランスのファッションプレートをお手本にした図案家のデザイン構図

図案家の山六郎と山名文夫は、雑誌「女性」の表紙を担当した。タイトルの女性ロゴは、山が制作した。漢字を欧文風のレタリングに仕上げ、まだ目新しい「女性」という文字に美しさと品格を与えてた<sup>23)</sup>(図1:雑誌「女性」を参照)。山名は、記憶する限りでは、漢字をこれほどヨーロッパ的な感覚で、明朝体、ゴシック体にこだわらず、文字の可読性のぎりぎりのところで造形処理に成功したものは、他にないという<sup>24)</sup>。西村氏は、雑誌「女性」の表紙は、主に「ガゼット・デュ・ボン・トン」誌からの流用を指摘した<sup>25)</sup>。ファッション

プレートから流用したこれら「女性」の表紙について荒俣宏氏は次のように語った<sup>26)</sup>。

特筆すべきは、「女性」に用いられたカバー画の多くが、パリの雑誌に掲載されたポショワール版画を流用したものだという点だろう。原画と寸分たがわぬ図も多く、原画家のサインを消した上で直接これを流用したかとすら思えるほどによく似ている。ただし、詳細に見ると、服の色や背景の形が微妙に異なり、山六郎と山名文夫がそれらの原画を精密に模写したことが判明する。

山は、ファッションプレートに接すること、模写すること、アレンジすることで多くのことを学んだ。モダン・ガールという女性像は、フランスのファッションプレートを用いてどのように表現したのであろうか。「ガゼット・デュ・ボン・トン」誌から流用しながらも色彩や背景、人物の細部を変え、原画の一部を用いて再構成したものもある。山は、フランスのファッションプレートから女性の「生き方」「暮らし方」などパーソナリティ、価値観、感性、センスなどが表現されていることを感じ取ったのではないだろうか。そこに、モダン・ガールの新しく生まれつつあった女性像をファッションプレートと重ね合わせながら表現したのが、雑誌「女性」の表紙に代表されるデザインであると考えられた。山や山名は、「ガゼット・デュ・ボン・トン」誌のファッションプレートをどのように抽出したのだろうか。大正12(1923)年2月の第3巻第2号の表紙は、「ガゼット・デュ・ボン・トン」誌、1921年、第1号、プレート8番<sup>27)</sup>、次の大正12年3月の第3巻第3号の表紙は、1912年11月のプレート7番<sup>28)</sup>のファッションプレートである。1923年の表紙は、1921年の2年後と1912年の11年後にファッションプレートを使用していた。山や山名たちは、フランスの流行をいち早く紹介するのではなく、プラトン社には「ガゼット・デュ・ボン・トン」誌が豊富に常在され、年号に関係なく見極められていたと考えられる。雑誌「女性」の表紙は、72枚である。72枚の第1巻1号と2号の表紙は、山が描く女性像で「覚醒」と題され、着物姿の女性が髪を風になびかせながら晴れ晴れと空を仰いでいる(図1、図2)。他70枚の表紙は、「ガゼット・デュ・ボン・トン」誌のファッションプレートの流用や原画のサインを削除するなど約半数を占めていた。山や山名が選んだファッションプレートの女性像は、アール・デコ期の身体とエレガントなドレスが織りなすイメージであり、時代の表象としての意味があると考えられる。

ファッションプレートの構図の中央に女性が描かれ、その女性が着用しているドレスに注目すると、図3の「ガゼット・デュ・ボン・トン」誌から流用した図4のファッションプレートは、黒のサテン生地にシルバークレーとシルバーで刺繍したイブニングドレスで図3と酷似している。ファッションプレートは、シノワズリーとジャポニスムの融合したデザインであり、イラストレーター・ジョルジュ・バルビエの作品である。家具の花柄模様は、ドレスの花柄模様に連



図1 (左)：雑誌「女性」、第1巻1号(大正11年5月)



図2 (右)：雑誌「女性」、第1巻2号(大正11年6月)



動するかのようにデザインされている。女性のイブニングドレスは、腰から流れるようなトレーンが左右にあり、バランスのとれたシンメトリーのイブニングドレスである。女性は、腕と胸元の肌を見せ、ドレスが美しく見えるように身体を曲線で描くポーズである。足元は、右足は横顔の位置に置き、左足はポイントの形であり、古典的なモデル姿勢の計算された構図であった<sup>29)</sup>。

図6、図8、図10の表紙は、「ガゼット・デュ・ボン・トン」誌のそのままの原画を用いたり、原画のサインだけを消去したものであった。雑誌「女性」の表紙には、ジャポニズムの影響を受けたキモノスタイルが多数、採用された。図5のファッションプレートも、イラストレーター、ジョルジュ・バルビエの作品である。女性の正装とされるフォーマルドレス（イ



図3 (左) : *Fumée*: evening gown by Beer ; drawn by George Barbier [1921, issue 1, Plate 8].

図4 (右) : 雑誌「女性」、第3巻2号 (大正12年2月)

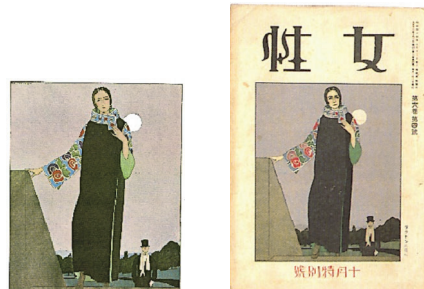


図5 (左) : *Le Dîner au château*: evening wrap by Paul Poiret; drawn by A(ndré)-E. Marty [1921, issue 6, Plate 46].

図6 (右) : 雑誌「女性」、第6巻4号 (大正13年10月)

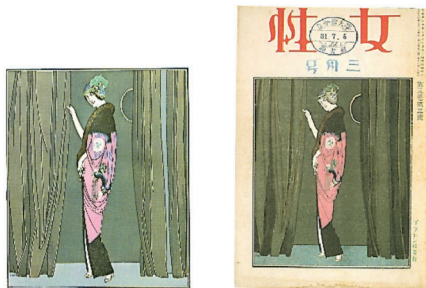


図7 (左) : *A la Comédie*: theater wrap by Paquin; drawn by J. (Francisco Javier) Gosé [Nov. 1912, Plate VII].

図8 (右) : 雑誌「女性」、第3巻3号 (大正12年3月)



図9 (左) : *Le Prologue ou La Comédie au château*: drawn by Pierre Brissaud [July 1920, Plate 40].

図10 (右) : 雑誌「女性」、第5巻第2号 (大正13年2月)

ブニングドレス：ラップドレス）を着用した女性は、ディナーに行くのであろう。生地素材は、ブラックサテンに筒袖に花柄模様、宝石や刺繍で装飾された矩形の襟であった。キモノスタイルは、直線で表現した矩形のデザインのドレスや筒袖であった(図5と図6)。図7は、パキヤンのイブニングコート（シアターコート）である。「ガゼット・デュ・ボン・トン」誌の創刊号のイラストレーションである。後ろ身頃の大きなドレープ、幅広の袖の打掛をはおったコートである。キモノスタイルは、肌を覆い隠すことによって、身体の肉体美を可視化することはできない。72冊の表紙で唯一、中央の女性が後ろ姿で登場するのは図10である。これも図9のようにイブニングドレスは、ミッドナイトブルーのシャルムズ生地とプリーツスカートである。イブニングドレスは、身体に生地を巻き付けるデザインである。プリーツスカートの直線と身体に巻き付ける曲線とがウエストで重なり合い、ウエストの細さを強調している。女性の肌は露出され、女性の肉体美をも表現している。女性の後ろ姿は、身体の曲線美を露わにしたポーズである。イブニングドレス（図10）は、曲線に対して、キモノスタイル（図6と図8）は直線である。曲線のドレスは、女性の身体美を表現できるが、キモノスタイルのように直線の場合は、身体の凹凸やくびれ感が隠されてしまう。山や山名は、目に見えない曲線美をどのように可視化したのだろうか。

図12は、「ガゼット・デュ・ボン・トン」誌の原画の一部を用いて再構成したものである。図11の座っているボブヘアの女性は、ポール・ボワレによるイブニングドレスである。これに対して雑誌「女性」の表紙では、異なる生地をストライプに組み合わせたドレスが、身体の曲線を際立たせている（図12）。ボブヘアの女性の髪色は、金髪から黒髪に変わり、日本のモダン・ガールに重ね合わせたスタイルであった。図12の大正14年3月発行から2か月後の表紙（図13）は、女性の裸体に透き通るような生地を覆い、身体全体で曲線を表現している肉体美が可視化した構図である。図14は、グリーン色の楕円の中に女性が飛び跳ねるようなポーズであり、イブニングドレスを輪切りにしたような渦線がデザインされている。女性は、楕円の線に沿わせるように身体の曲線美を表現し、ティアードのドレスが方向を示す



図11 (左) : *Les Grâces et Vénus en cbeveux courts*: [1924/5, issue 2, Plate9, undescribed].



図12 (右) : 雑誌「女性」、第7巻3号(大正14年3月)



図13 (左) : 雑誌「女性」、第7巻5号(大正14年5月)



図14 (右) : 雑誌「女性」、第10巻3号(大正15年9月)

ような構図である。背景に楕円形を描くことによって、これ以上身体が曲がらないところまで表現した。山は、身体の肉体美の延長線上に楕円形を描くことによって、かくれた次元での曲線美を可視化したのである。

「ガゼット・デュ・ボン・トン」誌を流用したファッションプレートは、色彩や背景、人物の細部を若干変えたものもある。図15のジョルジュ・バルビエが描いたイブニングドレスは、ビーズのフリンジで飾られたビーズベルト付きのゴールドドレスの色が図16の雑誌「女性」では、変えられた。女性の髪色は、金髪から黒髪になった。インテリアでは、チェスト家具の幅を狭くすることによって、花の装飾をなくし、その位置にブロンズ像が置かれた。背景には、グリーンの楕円形が追加され、図14の曲線美を表現した楕円形と相似していた。構図の中に楕円形をデザインすることは、直線的なドレスと隠された曲線の身体美の延長線上に可視化したと考えられる。

雑誌「女性」(図17)は、昭和3年5月号を最後に廃刊した。最後を飾った表紙には、一番手前に大きなカーテン、次に大きなソファでくつろぐ女性、中央にはエレガントなドレスの女性、背景には山々が見えるように遠近法が使われている。中央の女性は、直線的なドレスを着用し、断髪した女性に対し、大きなソファの女性は、恥じらいもなく休息している。しぐさ、動作、姿勢で新しい女性像が、顕在化したのである。図案家の原点ともいえるピアズリーの装飾は、大きなソファの隅に黒で表現している。最終号にふさわしく大きなカーテンが、幕を引く瞬間のひとコマであった。「ガゼット・デュ・ボン・トン」誌から流用した女性像は、昭和初期には丸顔、黒髪の断髪姿になり、廃刊に近づく時にはモダンな日本女性が表紙を飾った。

## 5. おわりに

雑誌「女性」は、小説、社会風俗、生活文化、芸術などあらゆる角度から新しい女性たちを評論、解説した。その表紙には、美しい西洋女性が描かれた。プラトン社には、「ガゼット・

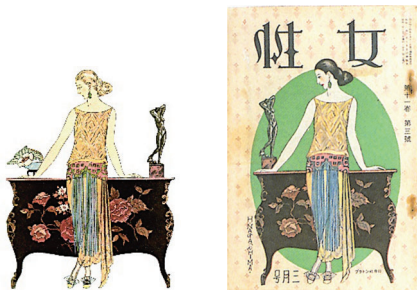


図15(左): ROSALINDE: evening gown by Worth; drawn by George Barbier [1922, issue 10, Plate 75].

図16(右): 雑誌「女性」、第11巻第3号(昭和2年3月号)



図17: 雑誌「女性」、第13巻第5号(昭和3年5月)



デュ・ボン・トン」誌が豊富にあった。フランスのファッションプレートは、デザイナーの新しいデザイン発表の場であった。山と山名は、時代（年号）に関係なく、新しい女性の表現をフランスのファッションプレートに重ね合わせたのである。今までにない曲線で表現される肉体美、ファッションの流行を感じるドレス、ライフスタイルなど、日本では見たことのない繊細なデザインや鮮やかな色彩、デザインの構図に新しい女性像を託したのである。

雑誌「女性」の表紙に思いを寄せた山と山名は、ドレスの直線美と身体の曲線美を試行錯誤しながら表現できたと考えられる。モダン・ガールと言われた女性像は、肉体美を尊重する自立した女性であった。自立した女性は、ドレスの直線で表現し、肉体美を身体の曲線で表現した。肉体の曲線美は、楕円形の美しさであり、強いものではない。ドレスの矩形は角があり強さを感じる。ドレスと肉体美を一種の型にシンボライズしたところに图案家のデザイン性があり、時代の象徴としての価値を創造した。山や山名は、エレガントな直線的なドレスの中に隠された曲線の身体を可視化した。日本のアール・デコ期の女性像は、ファッションが直線主体の矩形に対して身体は曲線主体の楕円形のデザインで表現することができた。「ガゼット・デュ・ボン・トン」誌から流用した女性像は、昭和初期には日本の断髪姿になり、廃刊に近づく時にはモダンな日本女性が表紙を飾った。山と山名は、新しい女性像をしぐさ、動作、姿勢で顕在化したのである。

## 文献

- 1) 山名文夫：『体験的デザイン史』ダヴィッド社、昭和 51（1976）年、p.3
- 2) 鶴見俊介：雑誌「女性」復刻版、日本図書センター、第 1 巻 大正 1 年 5 - 6 月号、平成 5 年、p.2
- 3) 小山静子：「女性史上における『女性』の意義 - 新しい女たちの姿を写す鏡 -」、雑誌「女性」復刻版、日本図書センター、第 48 巻、平成 5 年、p.115
- 4) 小野高裕、西村美香、明尾圭造：「モダニズム出版社の光芒 プラトン社の一九二〇年代」、淡交社、平成 12 年、p.102, 103
- 5) 上掲 3)、p.109
- 6) 上掲 4)、第二部 プラトン社の雑誌のデザイン、p.102-220
- 7) 雑誌「女性」復刻版：日本図書センター、大正 13 年 8 月 1 日発行、第 6 巻第 2 号、p.226-237
- 8) 上掲 7)、p.229
- 9) 雑誌「女性」復刻版：日本図書センター、大正 14 年 12 月 1 日発行、第 8 巻第 6 号、p.209-211
- 10) 雑誌「女性」復刻版：日本図書センター、大正 16 年 1 月 1 日発行、新年特別号、p.259
- 11) 雑誌「女性」復刻版：日本図書センター、昭和 2 年 11 月 1 日発行、第 12 巻第 5 号、p.200-201
- 12) 雑誌「女性」復刻版：日本図書センター、昭和 2 年 10 月 1 日発行、第 12 巻第 4 号、10 月号、p.285-286

- 13) 上掲 12)、p.1-8
- 14) 上掲 12)、p.372
- 15) 上掲 11)、p.270-275
- 16) 上掲 11)、p.276-281
- 17) 上掲 11)、p.287-289
- 18) 雑誌「女性」復刻版：日本図書センター、昭和2年12月1日発行、第12巻第6号、12月号、p.96-104
- 19) Dale Roylance: 「アール・デコ・パリ 1900-1925年 グラフィックアート collection ポショワールカラー版画展カタログ グラフィック・アート・コレクション」、プリンストン大学図書館クロニクル、1999年秋、Vol.61、p.51
- 20) Arthur M.Smith: 「*'Chevalier du Bracelet':George Barbier and his illustrated works*」、2013、p.11
- 21) 上掲 20)、p.10
- 22) 上掲 19)、p.49
- 23) GPOD (金谷仁美、三木学): 『MOGA モダンガール クラブ化粧品・プラトン社のデザイン』、青幻社、令和3(2021)年3月、p.116
- 24) 山名文夫: 新装復刻版『体験的デザイン史』、誠文堂新光社、平成27(2015)年3月23日、p.5
- 25) 上掲 4)、p.102, 103
- 26) 荒俣宏: 「流線型の女神」、牛若丸、平成10(1998)年、p.83
- 27) MR.BENJAMIN BLOM 「*FRENCH FASHION PLATES in FULL COLOR FROM THE GAZETTE du BON TON (1912-1925)*」: 58 Illustrations of Styles by Paul Poiret, Worth, Paquin and Others as Rendered by Georges Lepape, George Barbier et al., DOVER Publications, INC., NEW YORK、1979、p.1、36
- 28) 上掲 27)、p.59
- 29) 上掲 19)、p.35

出典：雑誌「女性」復刻版：日本図書センター、第48巻、平成5(1993)年9月25日

図1：雑誌「女性」、第1巻1号(大正11年5月)、p.1

図2：雑誌「女性」、第1巻2号(大正11年6月)、p.1

図4：雑誌「女性」、第3巻2号(大正12年2月)、p.3

図6：雑誌「女性」、第6巻4号(大正13年10月)、p.8

図8：雑誌「女性」、第3巻3号(大正12年3月)、p.3

図10：雑誌「女性」、第5巻第2号(大正13年2月)、p.6

図12：雑誌「女性」、第7巻3号(大正14年3月)、p.9

図 13 : 雑誌「女性」、第 7 巻 5 号 (大正 14 年 5 月)、p.9

図 14 : 雑誌「女性」、第 10 巻 3 号 (大正 15 年 9 月)、p.13

図 16 : 雑誌「女性」、第 11 巻第 3 号 (昭和 2 年 3 月号)、p.15

図 17 : 雑誌「女性」、第 13 巻第 5 号 (昭和 3 年 5 月)、p.18

出典 : MR.BENJAMIN BLOM 「*FRENCH FASHION PLATES in FULL COLOR FROM THE GAZETTE du BON TON (1912-1925)*」 : DOVER Publications, INC., NEW YORK, 1979

図 3 : SMOKE (*Fumée*): evening gown by Beer ; drawn by George Barbier [1921, issue 1, Plate 8], p.36

図 5 : DINNER AT THE COUNTRY ESTATE (*Le Dîner au cbâteau*): evening wrap by Paul Poiret; drawn by A(ndré) -E. Marty [1921, issue 6, Plate 46], p.40

図 7 : AT THE COMEDY (*A la Comédie*): theater wrap by Paquin; drawn by J.(Francisco Javier) Gosé [Nov.1912, Plate VII], p.1.

図 9 : THE PLOROGUE, OR AMATEUR PERFORMANCE AT THE COUNTRY ESTATE (*Le Prologue ou La Comédie au cbâteau*): drawn by Pierre Brissaud [July 1920, Plate 40], p.33

図 11 : VENUS AND THE GRACES WITH BOBBED HAIR (*Les Grâces et Vénus en cbeveux courts*): evening wrap and gowns by Paul Poret; drawn by A(ndré)-E.Marty [1924/5, issue 2, Plate9, undescribed], p.59

図 15 : ROSALINDE: evening gown by Worth; drawn by George Barbier [1922, issue 10, Plate 75], p.50

(受付日 : 2022. 12. 8)